

# 日本人女子コウホートのライフコース

—結婚年齢と出産年齢の差異を中心にして—

## 渡 邊 吉 利

### I はじめに

女性の生涯において結婚と出産はその生活の段階を画する顕著な事象である。人口の見地からも、結婚と出産はいずれも人口再生産の重要な要素であるといえる。女性の生涯における結婚と出産の重要性は、単に結婚あるいは出産をするのかしないのかが女性の生涯のパターンを決定的に左右しているというにとどまらず、結婚あるいは出産をするにしてもどの時点、何歳で結婚あるいは出産するのかによってその女性の生活段階を明確に画しているという意味においても重要なのである。

日本における結婚と出産の年齢、タイミングの研究は、家族ライフサイクル論の立場あるいは人口学の再生産の立場から行われてきたが、その多くは特定時点のクロスセクショナルなデータによるかあるいは特定年次のピリオド・データによるものである<sup>1)</sup>。しかし、再生産を行う女性の立場からいえばその結婚と出産はコウホートの生涯を通じて実現される過程であって特定時点や特定の期間だけの観察によってはその全体像をとらえられない。したがって、女性の生涯にわたる実際の結婚や出産の観察は、コウホート観察の方法によるのでなければならない。しかし、女性の生涯にわたる結婚と出産のデータを得るには、再生産年齢に限っても15歳から50歳にいたるまでの35年間のデータの蓄積が必要であり、決して容易ではない。

日本人女子コウホートのいくつかについて結婚と出産、死亡によるライフコース別分布の推移については、既に検討を行った<sup>2)</sup>。しかし、これまでの検討においては、結婚年齢に関しては国勢調査の

1) 結婚年齢と出産年齢の研究といっても、ここでの考察は日本全体の動向を問題にしているもので、その多くは動態統計などの期間 (period) のデータに基づくものがほとんどである。例外的にコウホートに関する分析の例は、再生産年齢の中途までであるが、小林和正、「1932年10月～33年9月生まれ全国日本人女子コウホートの人口学的分析」、『人口問題研究所年報』、第10号、1965年、pp.66-69. がある。その他、期間データに基づくものとして、鈴木栄太郎、「日本人家族の世代的発展における周期的律動性に就いて」、戸田貞三・鈴木栄太郎監修、『家族と村落 (第二輯)』、日光書院、1942年、pp. 1-50. Kiyomi Morioka, "Life Cycle Patterns in Japan, China and United States", *Journal of Marriage and the Family*, Volume 29 Number 3, August 1967, pp.595-606. 森岡清美、『家族周期論』、培風館、1973年、青木尚雄、「女性のライフサイクルの一試算」、『人口問題研究所年報』、第19号、1974年、pp.35-38. など古典的な業績があり、また比較的新しいものとして、Fumie Kumagai, "The Life Cycle of the Japanese Family", *Journal of Marriage and the Family*, Volume 46 Number 1, February 1984. がある。その他に期間データに基づきながら人口再生産の観点から結婚と出産の年齢について論じたものは非常に多いが、本稿では女性のライフコースと生活段階の検証を意図としているので、ここでは立ち入らない。また必ずしも全国的なデータによるものではないが、調査の結果などに基づいてコウホートのライフサイクルの各段階について緻密な検討を行ったものとして、前にも掲げた森岡清美、『家族周期論』、培風館、1973年、があり、その他にも、中鉢正美編、『家族周期と児童養育費』、至誠堂、1970年、がある。

2) アメリカにおけるアーレンバーグ (後述) の分析に倣って日本人女性に関して結婚年齢と出産年齢に仮設的な値を用いてライフコース別の分布を計算したものとして、渡邊吉利、「日本人女子コウホートの結婚と出産、死亡によるライフコース」、『人口問題研究』、第181号、1987年1月、pp.1-13. 参照。

アメリカの事例については Peter G. Uhlenberg, "A Study of Cohort Life Cycles: Cohort of Native Born Massachusetts Women, 1980-1920", *Population Studies*, Volume 23 Number 3, 1969, pp.407-420. 参照。

SMAM (singulate mean age at marriage) に基づく平均値を各コウホートについて適用しているが、実際には各コウホートの中においても結婚年齢に分布がみられるし、末子の出産年齢に関しても結婚年齢や出生児数によって違いがあると思われる。そこで、実際に各コウホートにおいて結婚年齢や出生児数によって末子の出産年齢にどのような違いや年齢分布パターンの相違があるかについて検証が必要である。

本稿では人口問題研究所が過去に実施してきた調査の中で再生産を完了した女性のコウホートについて結婚年齢と出産年齢が確認できるものでしかも全国的な動向の観察が可能なものを選び、その結婚と出産にわたる再生産の過程の観察を行う。

観察対象のコウホートは利用可能なデータであること、および、コウホートのもつ意義から以下の二つのコウホートを選んだ。すなわち、過去における長期的出生力水準の動向によれば、1905年以前の出生コウホートでは有配偶女子1人当たりの完結出生児数5人前後で安定しており出生児数に関しては1905年以前の出生コウホートは比較的均質と思われること、1905年から1930年のコウホートにかけて急激な完結出生力水準の低下を経て1930年頃のコウホートから出生力水準は2人程度と低位の安定水準に到達しているが、現在再生産の完了したコウホートとしては1930年頃のコウホートが最新のコウホートの部類に属することなどから、ここでは1900年のコウホートと1930年のコウホートを観察対象とする<sup>3)</sup>。実際の使用データは「第2次産力調査(1952年実施)」の妻の年齢50歳以上(1902年以前出生)のものを1900年出生のコウホートとして位置づけ、また「家族ライフコースと世帯構造変化に関する人口学的調査(1985年実施)」の男性世帯主の配偶者で年齢50～59歳(1925—1935年出生)のものを1930年出生コウホートとして位置づけて、その集計結果を利用した。

実際にある時点の出生コウホートではなくて幅をもった期間に出生したコウホートを扱わざるを得ないのは、標本調査における集計において分析に耐える程度のコウホートサイズを確保しなければならないことによる。したがって、以下の行文において1900年コウホートといったときは1900年を中心にして1902年以前の出生コウホートと読み換え、また1930年コウホートといったときは1930年を中心にして1925年から1935年の出生コウホートと読み換えて頂きたい。

## II 1900年と1930年のコウホートにおける結婚年齢と出産年齢

結婚年齢と出産年齢を観察するにあたって、本稿における結婚年齢あるいは出産年齢をあらわす指標について確認しておこう。本稿においては通常の算術平均も掲げてはあるが、主に使用するのは再生産年齢完了時の結婚水準あるいは出生力水準に関する三つの4分位水準時の年齢およびTukey's tri-meanおよびspreadとよばれる指標を用いる<sup>4)</sup>。tri-meanとは、結婚あるいは出生力水準の三つの4分位水準時の年齢の一種の加重平均であり、 $\text{tri-mean} = (q_1 + 2q_2 + q_3) / 4$  と定義される。spreadは年齢分布の広がりを表す指標であり第三4分位の年齢と第一4分位の年齢の差、すなわち、 $\text{spread} = q_3 - q_1$  と定義される。こうした指標を用いるのは、使用するデータのサンプル数が少ないので偶然サンプル中に紛れ込む分布の中心から大きくはずれたデータの影響を過大に受けたくないような統計的頑健性robustnessのある指標であることが要請されるからである。また、年齢の一点のみをあらわす指標というだけでなく、その分布をも表現できる指標が望ましいと男われたからである。tri-meanとspreadは、統計的頑健性を有し年齢の分布をもあらわすのに適切な指標の一つである。

3) 有配偶女子コウホートの出生力水準の長期的推移について観察した渡邊吉利、「完結出生力水準と出生意欲のコウホートの観察—各種出生力調査の妻の出生コウホートによる整理—」、『人口問題研究』第158号、1981年4月、pp.46—61。を参照。

4) John W. Tukey, *Exploratory Data Analysis*, Addison-Wesley, 1977.

表1 1900年コウホートおよび1930年コウホートにおける結婚年齢

カテゴリー	サンプル数	割合 (%)	平均子供数	結婚年齢						
				算術平均	tri-mean	spread	q <sub>1</sub>	q <sub>2</sub>	q <sub>3</sub>	
1900年 コウホート	総数	2,089	100.0	4.95	21.28	20.73	4.51	18.58	20.62	23.10
	結婚年齢 19歳以下	875	41.9	5.74	17.97	18.19	1.99	17.14	18.24	19.13
	20-24歳	927	44.4	4.81	22.07	21.95	2.28	20.85	21.92	23.12
	25歳以上	287	13.7	2.99	28.83	28.02	4.40	26.16	27.69	30.56
	出生児数 無子	172	8.2	0.00	23.98	23.23	6.79	20.21	22.85	27.00
	1-3子	534	25.6	2.18	22.37	21.66	5.29	19.16	21.53	24.45
	4-6子	699	33.5	5.00	21.20	20.83	4.02	18.85	20.79	22.87
7子以上	684	32.7	8.32	19.83	19.63	3.80	17.82	19.53	21.62	
1930年 コウホート	総数	1,262	100.0	2.19	23.90	23.37	4.46	21.24	23.27	25.70
	結婚年齢 19歳以下	173	13.7	2.55	18.57	18.90	1.46	18.05	19.02	19.51
	20-24歳	706	55.9	2.31	22.58	22.61	2.23	21.48	22.63	23.70
	25歳以上	383	30.3	1.80	28.72	27.72	4.06	25.99	27.42	30.04
	出生児数 無子	79	6.3	0.00	27.59	26.42	7.09	23.48	25.81	30.56
	1-3子	1,082	85.7	2.16	23.80	23.35	4.34	21.27	23.25	25.61
	1子	158	12.5	1.00	25.41	24.67	5.62	22.30	24.22	27.92
	2子	597	47.3	2.00	23.95	23.60	4.20	21.60	23.49	25.80
	3子	327	25.9	3.00	22.74	22.35	3.97	20.39	22.33	24.37
4子以上	101	8.0	4.23	22.08	21.94	3.93	20.14	21.77	24.07	

注) tri-mean = (q<sub>1</sub> + 2q<sub>2</sub> + q<sub>3</sub>) / 4.

spread = q<sub>3</sub> - q<sub>1</sub>.

(但し, q<sub>1</sub>, q<sub>2</sub>, q<sub>3</sub> はそれぞれ第一～第三四分位水準時の年齢)

1900年コウホートおよび1930年コウホートの平均結婚年齢は下記に示す調査データの集計に基づくものであって、国勢調査の未婚率に基づくSMAM (singulate mean age at marriage)の値とは異なる。

国勢調査の未婚率に基づくSMAMの値は、1900年コウホート21.2歳、1930年コウホート23.7歳であり、上に示した調査データの集計に基づく平均年齢に極めて近い値である。

資料) 1900年コウホートは、「第2次出産力調査(1952年実施)」における年齢50歳以上(1902年以前出生)の妻。

1930年コウホートは、「家族ライフコースと世帯構造変化に関する人口学的調査(1985年実施)」における男の世帯主の配偶者(妻)で年齢50-59歳(1925-1935年出生)のもの。

### 1. 1900年コウホートと1930年コウホートの特徴

まず、1900年と1930年のコウホートにおける結婚年齢をみてみよう(表1および図1～2参照)<sup>5)</sup>。結婚年齢は1900年コウホートの20.7歳に対し、1930年コウホートでは23.4歳と2.7年の上昇を示したが、その分布の広がりを示すspreadの値はいずれのコウホートも4.5年と変わらない。言い換えれば、1900年コウホートと1930年コウホートとでは、後のコウホートにおいて結婚年齢の中心は2.7年ほど

5) アメリカにおけるコウホートの結婚年齢や出産年齢についての動向を検討したものとして、グリック等による一連の仕事を参照。

Paul C. Glick and Robert Park Jr., "New Approaches in Studying the Life Cycle of the Family", *Demography*, Volume 2, 1965, pp.187-202., Paul C. Glick, "Updating the Life Cycle of the Family", *Journal of Marriage and the Family*, Volume 39 Number 1, February 1977, pp.5-13., Graham B. Spanier and Paul C. Glick, "The Life Cycle of American Families: An Expanded Analysis", *Journal of Family History*, Volume 5 Number 1, Spring 1980, pp.97-111.

表2 1900年コウホートおよび1930年コウホートにおける第1子出産年齢, 末子出産年齢

カテゴリー		第1子出産年齢						
		算術平均	tri-mean	spread	q <sub>1</sub>	q <sub>2</sub>	q <sub>3</sub>	
1900年 コウホート	総数	23.28	22.64	4.64	20.41	22.54	25.05	
	結婚年齢	19歳以下	20.47	20.16	2.28	19.02	20.16	21.30
		20-24歳	24.01	23.70	2.58	22.46	23.65	25.04
		25歳以上	30.81	29.99	5.28	27.71	29.63	32.98
	出生児数	1-3子	25.77	24.92	7.18	21.65	24.59	28.83
		4-6子	23.14	22.83	4.15	20.79	22.80	24.94
		7子以上	21.49	21.31	3.60	19.53	21.29	23.13
1930年 コウホート	総数	25.06	24.64	4.69	22.41	24.51	27.10	
	結婚年齢	19歳以下	20.69	20.47	2.27	19.34	20.46	21.61
		20-24歳	24.17	24.02	2.57	22.71	24.06	25.27
		25歳以上	29.13	28.84	3.86	27.04	28.71	30.90
	出生児数	1-3子	25.28	24.83	4.73	22.61	24.68	27.35
		1子	27.95	27.48	6.98	24.20	27.27	31.18
		2子	25.43	25.12	4.40	23.01	25.02	27.41
		3子	23.69	23.44	3.71	21.60	23.41	25.31
4子以上		22.68	22.63	3.81	20.84	22.50	24.66	
カテゴリー		末子出産年齢						
		算術平均	tri-mean	spread	q <sub>1</sub>	q <sub>2</sub>	q <sub>3</sub>	
1900年 コウホート	総数	36.78	37.71	8.15	33.13	38.21	41.28	
	結婚年齢	19歳以下	36.10	37.34	8.68	32.33	38.02	41.01
		20-24歳	36.94	37.64	8.31	33.09	38.04	41.40
		25歳以上	38.76	39.10	6.24	35.60	39.48	41.84
	出生児数	1-3子	31.23	30.92	9.66	26.42	30.60	36.08
		4-6子	36.99	37.15	5.98	34.14	37.17	40.12
		7子以上	40.93	41.11	3.60	39.26	41.16	42.85
1930年 コウホート	総数	29.26	29.03	5.41	26.39	28.97	31.80	
	結婚年齢	19歳以下	25.48	25.16	4.66	22.88	25.11	27.54
		20-24歳	28.55	28.27	4.20	26.31	28.14	30.50
		25歳以上	32.57	32.43	4.86	30.15	32.27	35.01
	出生児数	1-3子	29.07	28.81	5.33	26.24	28.72	31.57
		1子	27.95	27.48	6.98	24.20	27.27	31.18
		2子	28.95	28.63	5.13	26.22	28.47	31.36
		3子	29.80	29.56	4.78	27.16	29.57	31.94
4子以上		31.10	31.11	5.12	28.54	31.12	33.66	

注) 表1を参照.

上昇したが, 特定の年齢幅への結婚の集中傾向は変わらず, 社会的ノルムとしての結婚適齢規範は30年前と同様の強さを持っているとも判断できよう.

第1子の出産年齢についてみると, 1900年コウホートではtri-meanの値は22.6歳と結婚(20.7歳)から1.9年後であるのに対し, 1930年コウホートでは結婚(23.4歳)から1.2年後の24.6歳で第1子を出産している(表1~2および図1~2参照). すなわち結婚後, 第1子出産までの間隔は1930年

コウホートの方が短くなっている。

ここで末子の出産年齢の検討に移る前に、1900年と1930年のコウホートにおける完結出生児数についてふれておこう（表1参照）。1900年コウホートの完結出生児数の平均は4.95人であり、分布の中心は4～6人のところにあるが、1～3人や7人以上の割合も多く、出生児数は広い範囲に分布している。1930年コウホートについてみると、完結出生児数の平均は2.19人であり、児数の分布の中心は2～3人のところに集まり特に2人への集中は強く半数近くが出生児数2人である。これを要約すれば、1900年コウホートの出生児数は5人を中心に広範囲に分布し多様であったが、30年後のコウホートでは出生児数は減少し2人ないし3人へと出生児数の画一化が進行した。

こうしたそれぞれのコウホートの結婚年齢と出生児数の動向はその末子の出産年齢の分布にも大きな違いをもたらしている。

そこで、1900年と1930年のコウホートにおいて末子の出産年齢がどのように異なるかをみてみよう。1900年コウホートの末子の出産年齢のtri-meanは37.7歳であり、結婚（20.7歳）から17年後、第1子の出産（22.6歳）から15年後である。また末子出産年齢の分岐の広がりを示すspreadは8.2年である。これに対し1930年コウホートの末子の出産年齢は29.0歳と結婚（23.4歳）から5.6年後、第1子出産（24.6歳）から4.4年後であり、30年前のコウホートに比較して8.7年早く末子の出産を終えている。また末子出産年齢の分布の広がりを示すspreadは5.4年と30年前のコウホートの8.2年より短くなっている。

すなわち、1900年コウホートに比べ、1930年コウホートでは出生児数が少なくなっただけでなく出生児数2～3人と特定の出生児数への集中傾向によって末子の出産年齢においても29歳を中心にした数年間に集中する傾向を示すに到った。これを要するに、30年間に女性の生活段階の時間的区切りは画一化が進行したと言えよう。

## 2. 結婚した年齢の違いによる出産年齢の差異

こうしたそれぞれのコウホートにみられる出産年齢などの特徴は、同じコウホートの内部において

図1 結婚、第1子と末子の出産年齢パターン：1900年コウホート

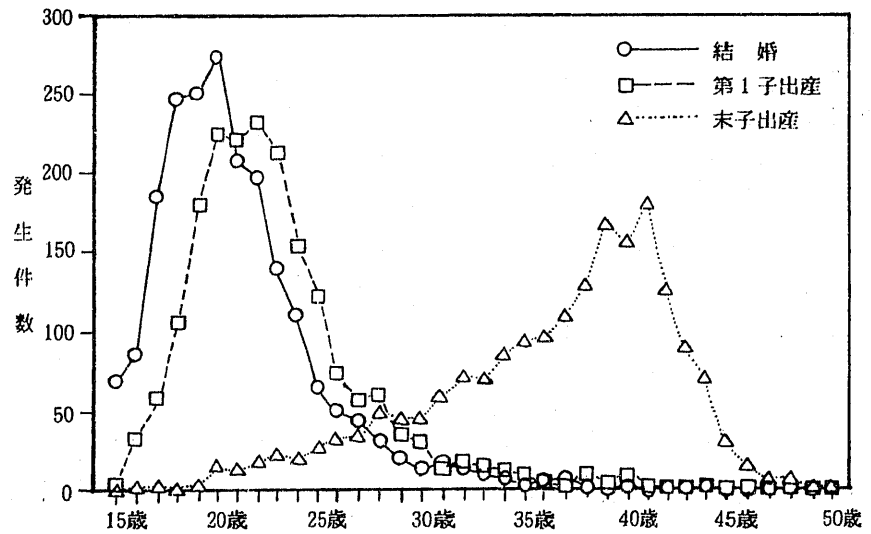
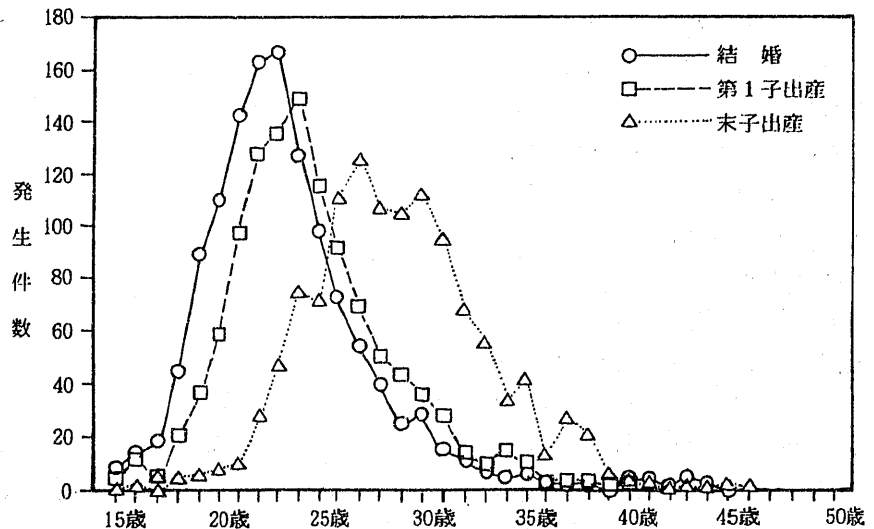


図2 結婚、第1子と末子の出産年齢パターン：1930年コウホート



も結婚年齢の違いや完結出生児数の違いによって異なった様相をみせる。そこでここでは、結婚年齢や出生児数の違いとその出産の年齢パターンとの関連を観察しよう。

まず、結婚年齢の違いによる完結出生児数の違いからみるとする(表1参照)。1900年コウホートについてみると、結婚年齢20歳未満では5.74人、20~24歳で4.81人、25歳以上の結婚では2.99人となり、結婚年齢の違いは他の条件にして同じならば出生児数の水準を変える。このことは出生児数のレベルは異なるが1930年のコウホートにおいても同様であり、結婚年齢20歳未満の2.55人、20~24歳の2.31人、25歳以上の1.80人と結婚年齢の上昇は完結出生児数の水準を低下させる。

では結婚年齢の変化による完結出生児数の水準の違いが末子の出産年齢のパターンにどのような影響をもつかを検討すると、1900年コウホートと1930年コウホートとでは、その効果がまったく異なることが認められる(表2および図5~6参照)。

すなわち、1900年コウホートでは結婚年齢の違いは出産のスタート年齢の違いをもたらす(第1子の出産年齢についての図3参照)けれども、出産の終了時点を意味する末子の出産年齢にはあまり影響を与えないのである(図5参照)。

これに対し、1930年のコウホートでは結婚年齢の違いは出産のスタート年齢の違いをもたらすのは勿論(第1子の出産年齢に

図3 結婚年齢の違いによる第1子出産年齢パターン：1900年コウホート

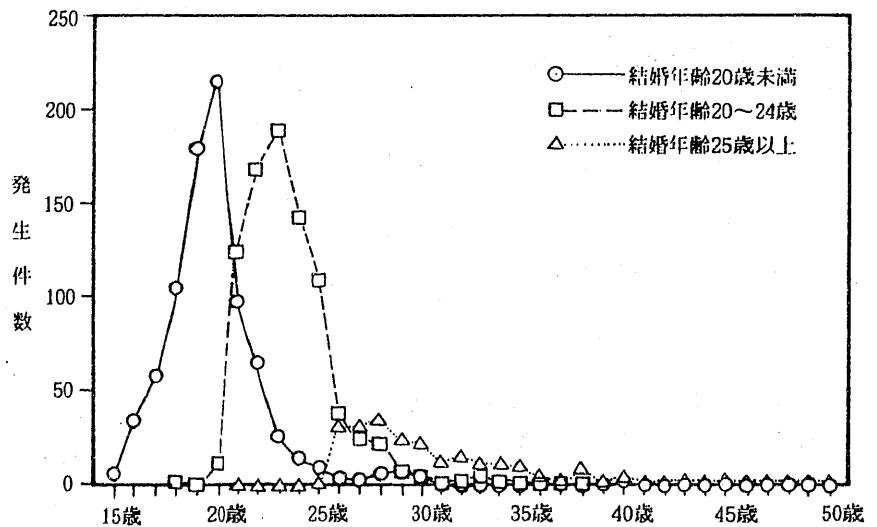


図4 結婚年齢の違いによる第1子出産年齢パターン：1930年コウホート

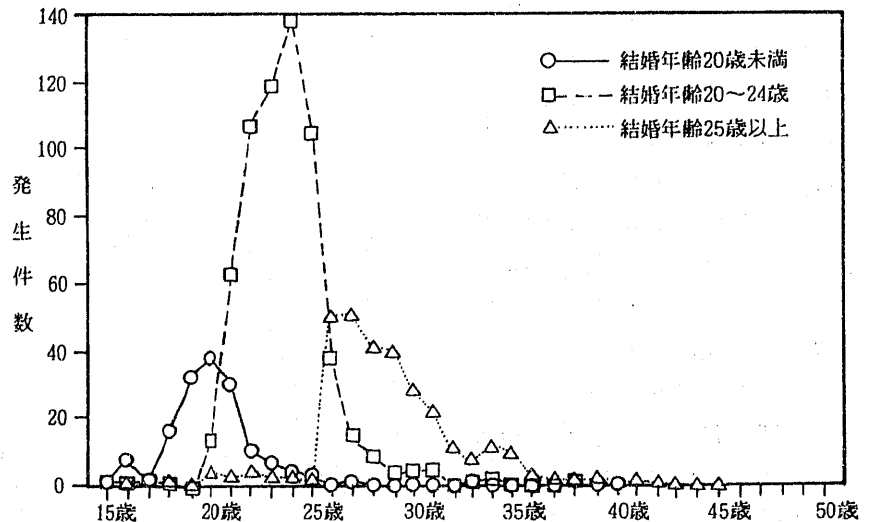
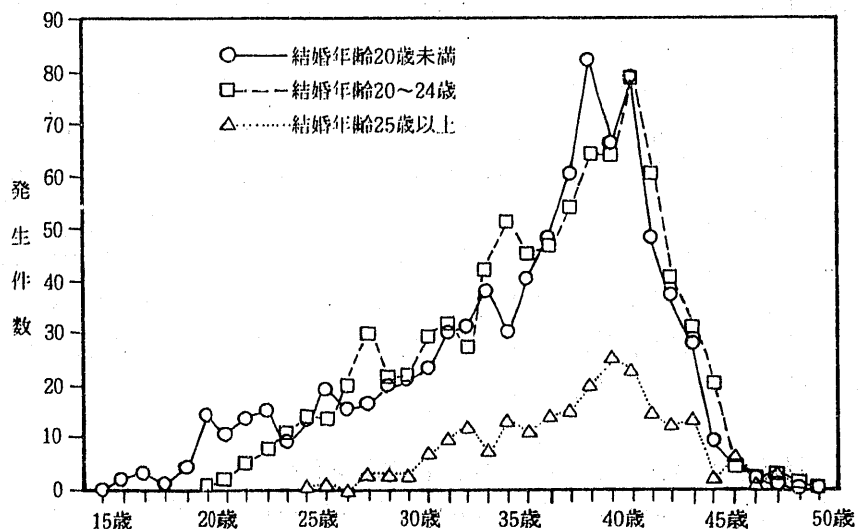


図5 結婚年齢の違いによる末子出産年齢パターン：1900年コウホート



ついでに図4参照)のこゝと、出産の終了時点である末子の出産年齢にも大きな変化をもたらすことが判かる(図6参照)。

結婚年齢の違いが末子の出産年齢に与える影響の、この新旧両コウホート間の違いは、恐らく、1900年コウホートの出生力が比較的抑制の少ない自然出生力に近いものであるのに対し、1930年コウホートの出生力は日本における長期的出生力低下後の抑制された出生力であることによると思われる。

図6 結婚年齢の違いによる末子出産年齢パターン：1930年コウホート

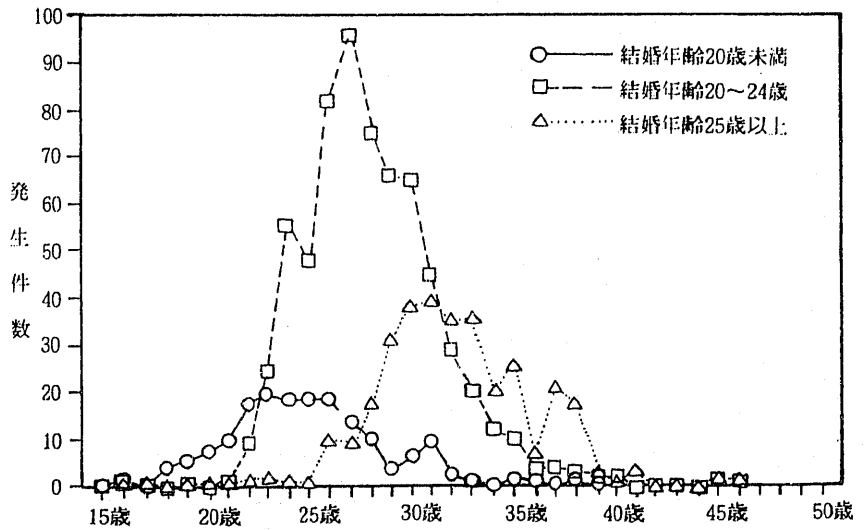


図7 完結出生児数の違いと結婚年齢パターン：1900年コウホート

### 3. 完結出生児数の違いと結婚年齢、出産年齢の差異

つぎに完結出生児数の違いが、その結婚年齢や出産の年齢パターンとどのように関連するかを検討してみよう。

1900年コウホートにおいても1930年コウホートにおいても、相応する年齢は異なるが、完結出生児数の少ないものは結婚年齢がわずかづつ高く、逆に完結出生児数の多いものは結婚年齢が若いことが認められる(表1および図7~8参照)。

また、出産のスタートである第1子の出産年齢についても、両コウホートとも結婚年齢との関連でみられたと同様に、完結出生児数が多い場合は第1子の出産年齢がわずかながら若く、完結出生児数が少ない場合は第1子の出産年齢が高い(表2および図9~10参照)。

さらに、出産の終了時点である末子の出産年齢についてみると逆に、1900年および1930年の両コウホートともに、完結出生

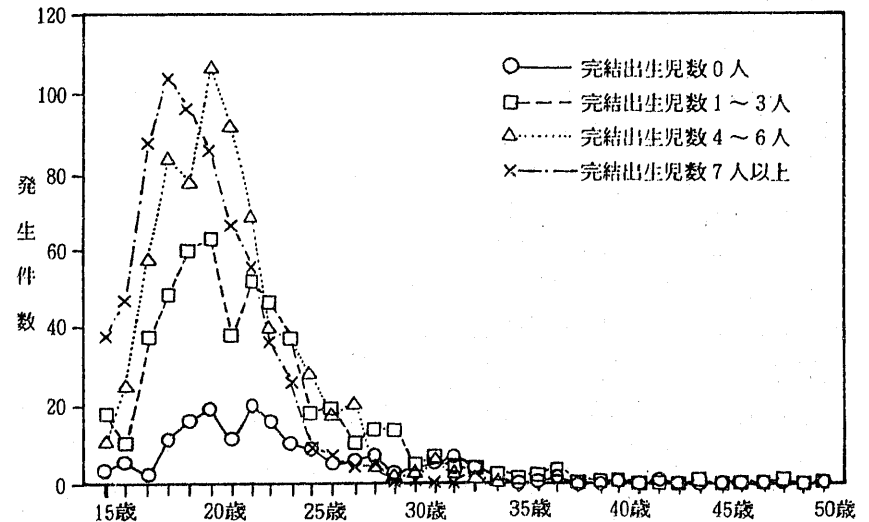
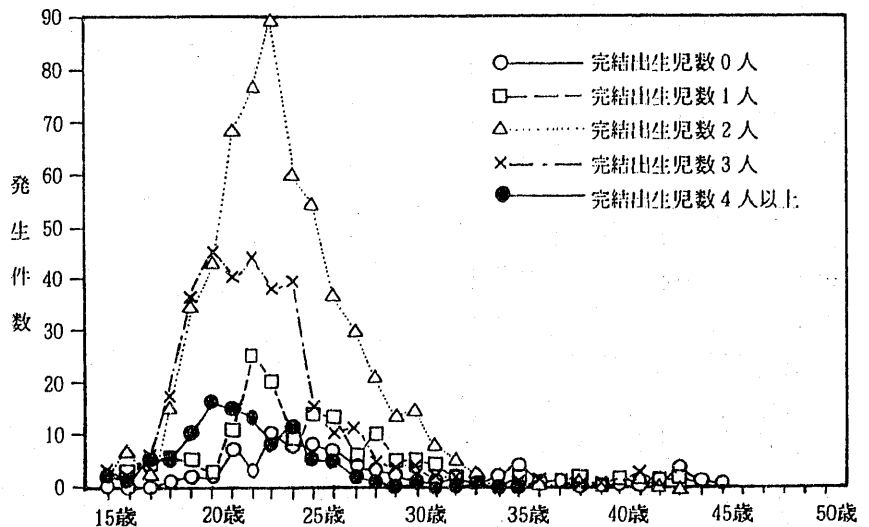


図8 完結出生児数の違いと結婚年齢パターン：1930年コウホート



児数が多い場合は末子の出産年齢が高くなり、完結出生児数が少ない場合は末子の出産年齢が低くなる（表2および図11~12参照）。

以上のことを要約的に述べれば、結婚年齢の違いは出産年齢のスタート時点を実質的に決めることによって、新旧両コウホートとも、そのレベルは異なるにしても完結出生児数に影響する。ところで、1900年コウホートのように出生力が抑制のない自然出生力に比較的近い状態では、結婚年齢は末子の出産年齢にあまり影響を与えない。ところが、1930年コウホートのように出生力が抑制されている状態では、結婚年齢の違いは末子の出産年齢にまで大きな影響を与える。

一方、完結出生児数は結婚年齢の影響を受けることは前に述べたとおりだが、同時に完結出生児数の違いは出産の終了を意味する末子の出産年齢に影響を及ぼして、出生児数が多ければ末子の出産年齢が高く、出生児数が少なければ末子の出産年齢は低くなる。

こうした新旧両コウホートの結婚年齢、第1子出産年齢、末子の出産年齢のtri-meanとその分布の広がりspreadを要約的に示したのが図13である。ここでは、後のコウホートほどその子の高学歴化が進みまた結婚年齢が上昇することなどから、末子の独立年齢を1900年コウホートでは20歳、1930年コウホートでは末子25歳と仮定してある。すると、末子独立時の女性（母親）の年齢のtri-meanは、1900年コ

図9 完結出生児数の違いと第1子出産年齢パターン：1900年コウホート

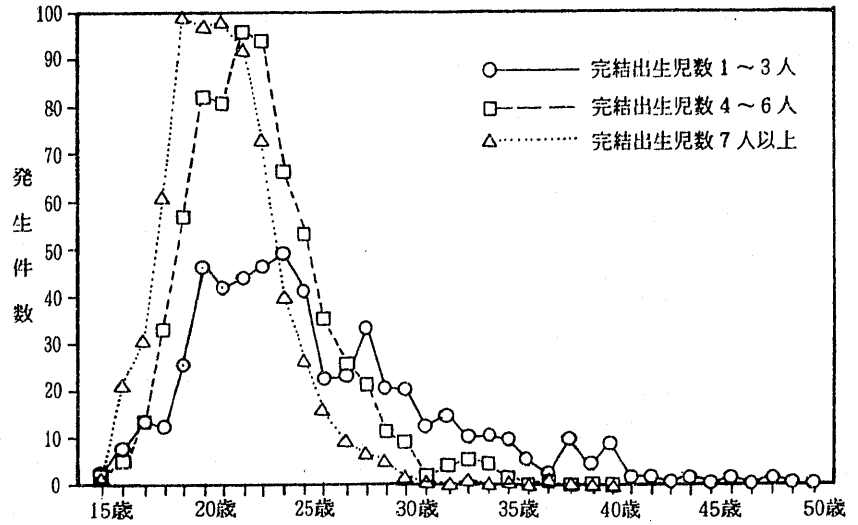


図10 完結出生児数の違いと第1子出産年齢パターン：1930年コウホート

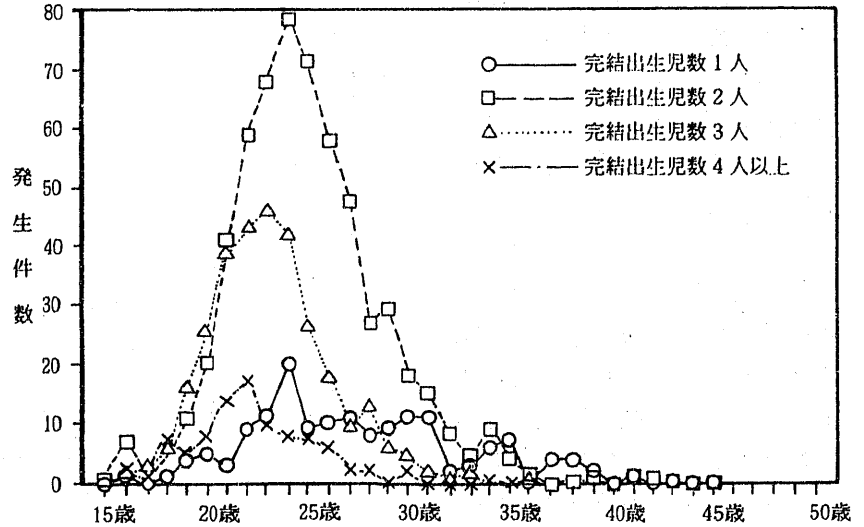
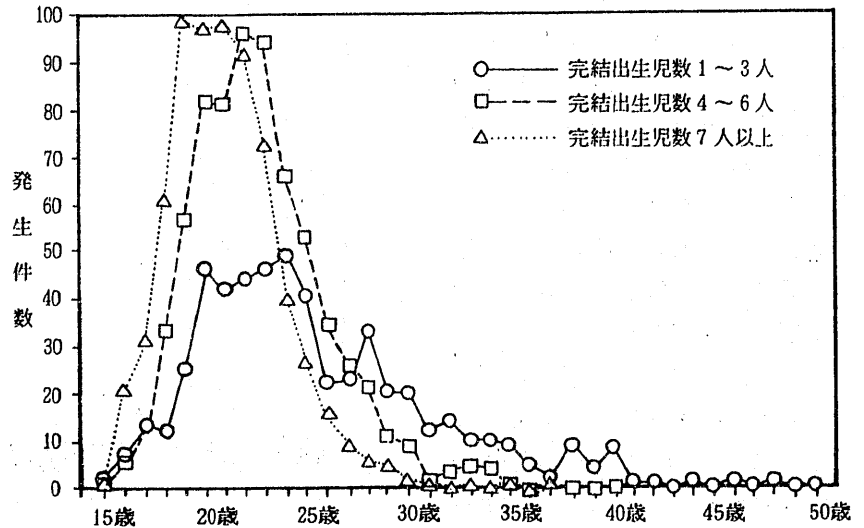


図11 完結出生児数の違いと末子出産年齢パターン：1900年コウホート





ウホートでは57.7歳であるのに対し、1930年のコウホートでは末子の独立年齢を5歳上昇と仮定したにもかかわらず54.3歳と少し若い年齢で末子の独立を迎えることになる。

また、母親の年齢分布を考えると、広がりspreadの両端はそれぞれ第一四分位と第三四分位の年齢を示すから、1900年コウホートでは53.1歳までに末子の独立を迎える女性が1/4あり、中心をなす全体の1/2の女性は53.1歳から61.3歳の間

に末子の独立を迎え、残る1/4の女性は61.3歳以降に末子の独立を迎えることになる。1930年コウホートでは、51.4歳までに最初の1/4の女性が末子の独立を迎え、51.4歳から56.8歳の間

図12 完結出生児数の違いと末子出産年齢パターン：1930年コウホート

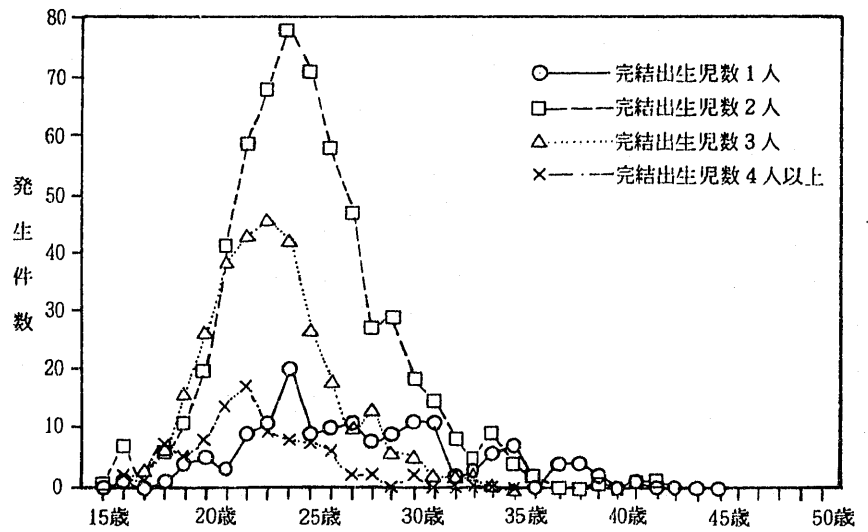
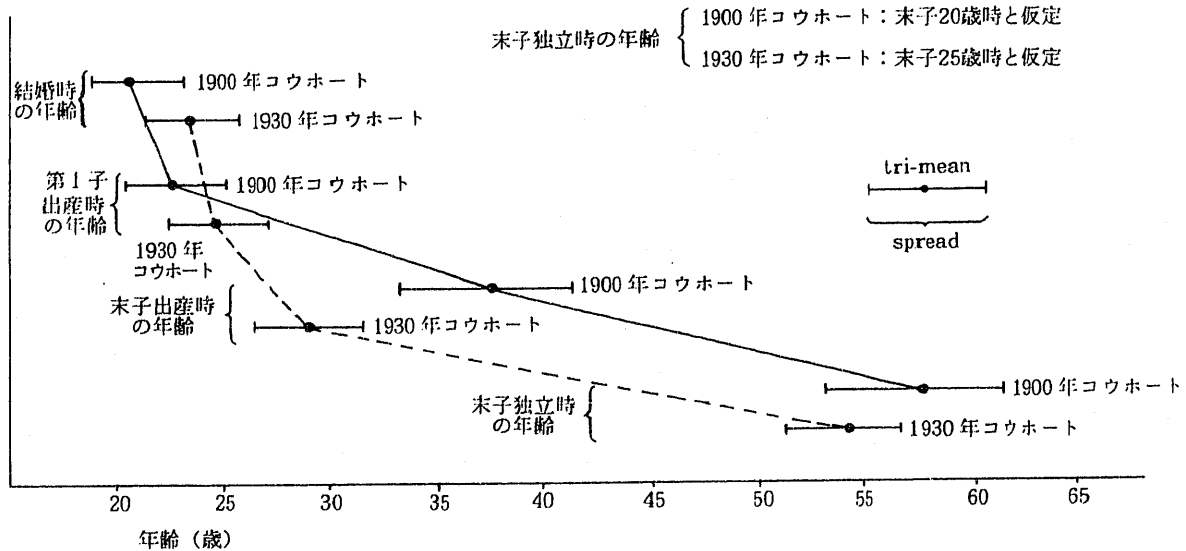


図13 1900年と1930年のコウホートにおける生活諸段階を迎える年齢：tri-meanとspread



### III 結びに代えて

1900年と1930年のコウホートについて、結婚年齢、第1子の出産年齢、末子の出産年齢の検討をしてきた。

完結出生児数についてみると、1900年コウホートは4.95人であり、1930年コウホートでは2.19人と30年間に大きく減少した。その結婚年齢は1900年コウホート20.7歳に対し、1930年コウホートは23.4歳と2.7年上昇したが、その間に出生児数が減少したため末子の出産年齢は1900年コウホート37.7歳に対し1930年コウホートは29.0歳と8.7年早くなった。また末子の出産年齢の広がりも子供数が2~3人と特定の子供数に集中することによってspreadの値は1900年の8.2年から1930年コウホートでは

5.4年と29歳を中心とする数年間に集中するに到った。つぎに、各コウホートの中で結婚年齢と出生児数の違いは末子の出産年齢にどのような与えるかを検討した。その結果、結婚年齢の違いは1900年コウホートでは末子の出産年齢にほとんど影響を与えず、1930年のコウホートでは結婚年齢の遅れは末子の出産年齢に遅れをもたらすことが認められた。各コウホートの中で、完結出生児数の違いが末子の出産年齢に与える影響をみると、新旧両コウホートとも、出生児数の多寡は末子の出産年齢の遅い早いに影響することが認められた。

1900年コウホートと1930年コウホートの全体について要約すれば、30年間に女性の結婚は遅くなったが、子供数が減少して末子を産み上げる年齢が繰り上がることによって女性の生活段階の時間的区切りは間隔が短くなり画一化が進行したと言える。また、後のコウホートの女性は末子を産み上げるのが早くなったので、末子の独立年齢が仮に5年程度遅くなったとしても、その母親である女性は30年前のコウホートより若い年齢で末子の独立を迎えるようになったといえることができる。

## Age Patterns of Reproductive Life Stages in Female Cohorts of the Japanese : 1900-1930

Yoshikazu WATANABE

The present study aims at analyzing the age patterns of reproductive life stages among Japanese female cohorts.

The cohorts with which we dealt in this study are those women who were born in 1900, and those women who were born in 1930. We take the former as the last cohort of pre-transition period in Japanese fertility trends. And we consider the latter for the first cohort of post-declined period in Japanese fertility change. Namely, the fertility of women who were born in 1900 was around 4.95 children per married women. And for married women who were born in 1930, the fertility was 2.19 children on the average.

Major results of this study are as follows ;

(1) Among female cohort those who were born in 1900, tri-mean age of women at marriage was 20.7 years, tri-mean age of mothers at birth of first child was 22.6 years, and that age of mothers at birth of last child was 37.3 years.

Since, among cohort of women who were born in 1930, tri-mean age at marriage was 23.4 years, tri-mean age at birth of first child was 24.6 years, and that age at birth of last child was 29.0 years.

The age at marriage in the former cohort was 2.7 years earlier than that in the latter cohort. And the age at birth of last child in the former cohort was 8.7 years later than that in the latter.

(2) When women have more children, the age at birth of last child have become old in both cohorts, though the age levels are different by cohort.

When women have married earlier, the situation of age at birth of last child have changed by the cohort. Early marriage did mean early stop of child bearing in the latter cohort. However, in the former cohort, early marriage did not make sense of early ending of child bearing.